

むかし、あるところに、貧乏なおじいさんがいました。ちつともよい運が向いてこないのです、あるとき、観音さまにお参りました。

「どうか、よい運をさずけてください」と、おじいさんは、七日七晩、お堂に泊まつてお祈りをしました。

八日目の朝になりましたが、どうも運がさずかったようには思えません。しかたなく、お堂の前の坂道を、ぶらりぶらりと下りて行きました。すると、後ろから、ひょうたんがひとつ転がって来ました。おじいさんは、

「おや。どこから転がって来たんだろう」と思つて、首をかしげて立ちどまりました。すると、ひょうたんも、転がるのをやめました。

「おや、おや。ふしぎなひょうたんだ」

おじいさんが歩きだすと、ひょうたんもまた、転がってついて来ます。おじいさんは、ますますおかしなひょうたんだと思つて、

「どれ、じゃあ、抱っこしてみよう」といつて、ひょうたんを抱きあげました。すると、ひょうたんの中から、子どもがふたり、ひよっこりと飛びだしてきました。おじいさんは、びっくりしました。

子どもらは、おじいさんの顔を見て、笑いながらいました。

「おじいさん。おれたちは、観音さまからのいいつけで、おじいさんの所に来たんだ。

おれは、金七（きんしち）」

「おれは、孫七（まごしち）」

「何でも、いい事をしてあげるから、いいつけてくれ」

「おじいさん、何がほしい？」

おじいさんは、

「それはありがたい。では、お酒を少々と、それから、だんごだ、だんご」といいました。

子どもたちは、お酒とだんごを、つぎつぎにひょうたんからとり出して、おじいさんにすすめました。おじいさんは、大喜びでお腹いっぱい食べました。そして、いいぐあいに酔っぱらいました。それから、ひょうたんをかついで、金七と孫七の手を引いて、ぶらりぶらりと歩いて行きました。

歩きながら、おじいさんは、ひょうたんからおいしい物を取り出しては、町の人たちにごちそうしました。おじいさんの宝のひょうたんは、町じゅうの評判になりました。

あるとき、おじいさんが、いつものように道ばたでみんなにごちそうしていると、ひとりの馬喰（ばくろう）が、馬を引いて通りかかりました。馬喰は、おじいさんのひょうたんがほしくなりました。そこで、

「この馬七頭と金三百両をやるから、そのひょうたんをおれに取れないか」といいました。おじいさんが、

「これは、観音さまからいただいた宝物だから」とことわると、金七と孫七が、「いいから、ひょうたんをやれ」とささやきました。おじいさんが、しぶしぶひょうた人を渡すと、馬喰は、馬とお金をそこにおいて、逃げるように行ってしまうました。

馬喰は、お城に行つて、

「お殿さまに、ふしぎな宝のひょうたんをさしあげたい」と申し出ました。そして、お殿さまの前に出ると、ひょうたんから「ごちそうを出して見せよう」としました。ところが、ごちそうどころか、ひょうたんからは、しずく一滴出て来ません。お殿さまは、火のよゝに怒つて、家来に馬喰をつまみ出させました。馬喰は、命からがら逃げて行きました。おじいさんは、ひょうたんのおかげでお金持ちになつて、金七と孫七といっしょに、楽しく暮らしたということです。

おしまい

原話：『江差郡昔話』佐々木喜善編著／郷土研究社
再話：村上郁